

流れの中に立つ、アートと再発見の方法としてのキュレーション

渡邊 賢太郎

私は京都を拠点に活動している。

この土地は、古い文化の層と観光都市としての現代的装置が複雑に重なり合う場所であり、日々その狭間で「日本らしさ」とは何かという問いに直面する。

ここでは文化がしばしば観光のために演出され、メディアや制度の中で整理されていく。

いま「日本的」と名づけられるものは、そうした構造を通過するたびに理解しやすい記号へと均されていく傾向がある。外部の視線を意識した自己演出は、決して現代の固有の現象ではない。明治期の欧化政策とその反動、戦後の文化再評価の波を経てもなお、私たちは自国像を外からの光で測り直すことを繰り返してきた。グローバルな情報環境が常態化した現在、そのネットワークは一段と高速化し、「日本とは何か」「日本人であるとはどういうことか」という基本的な問いが、皮肉にも輪郭を失いやすくなっている。しかし、京都に暮らす私にとって、この状況は避けがたい現実であり、むしろこの問いを常に更新し続けている。

本展で私が見つめたいのは、その問いの先にある「美」をめぐる日本の思考である。

ここでいう美とは、造形の完成度や技術的洗練のことだけではない。儚さを受け入れる感受、余白と間に潜む豊かさ、自然や他者との関係に敬意を払う姿勢、そうした態度が織り重なって形成されてきた、生活と思考の作法を指す。屏風や茶碗にだけ宿るものではなく、暮らしの所作、建築の陰影、季節を待つ時間の長さといった日常の中にも息づいている。

私は展覧会を、答えを提示する場ではなく、まなざしを揺らがせる場として構想している。

鑑賞という行為が、個々の記憶や身体の実験と重なり合うとき、作品は単なる“見る対象”ではなく、時間や思考の流れを呼び戻す“媒介”へと変化する。理解の即答ではなく、立ち止まるための余白。そのわずかな遅延の中で、私たちは見過ごしてきた“流れ”の存在に気づくのではないかと思う。

私にとってキュレーションとは、意味を与えることではなく、意味が生まれる条件を整える行為である。光、距離、沈黙、順序、これらの関係を調律し、作品同士や観客の間に生まれる“間”を育てていくこと。展示空間は、過去と現在、個と社会が擦れ合う「中空」にこそ生命を帯びる。そこに流れる見えない水脈のような呼吸を感じ取りながら、私はキュレーターとして、その流れのかたちを探っている。

以下では、アートと社会、祝祭と記憶、そして「流れ」と「中空」を軸に、本展の設計思想を順に述

べていく。

1、アートとは「生きること」の延長線にある

アートとは何か。それは世界を見直すための“感覚の装置”であり、「生きること」の延長線上にある営みである。作品は作者の内部から湧き上がるものであると同時に、社会の中で呼吸する存在でもある。そこには常に「個」と「世界」のあいだの緊張があり、アートはそのずれや歪みを可視化する媒介として機能する。社会における芸術の役割は、政治的な意見表明や解決策の提示ではなく、むしろ見えない痛みや名づけられない不安、あるいは祈りのようなものを浮かび上がらせることにある。

アートは、思考よりも先に「感じる」ための方法でもある。感じることは、世界と再び出会うための行為であり、他者と共に生きるための第一歩でもある。人が他者と関わる時、言葉よりも先に感覚が存在する。アートはその感覚を呼び覚まし、私たちが生きる世界の輪郭を取り戻すための装置である。社会問題に対してアートができることは、答えを出すことではなく、“問いをひらく”ことである。問いがひらかれるとき、思考と感覚のあいだに流れが生まれる。私はその流れの存在こそ、アートの本質だと考えている。

2、現代社会と「流れ」の断絶

現代社会では、情報が圧倒的な速度で流れている。しかし、その流れは、少なからず断片の連なりに過ぎない。SNSのタイムラインを眺めていると、私たちは“いま”の表層を消費し続けながら、時間の厚みを失っていく。過去も未来も現在の中に圧縮され、流れているようでいて、実際には停滞しているのではないか。この「流れの断絶」は、私たちの知覚と感性のあり方にも深く影響を及ぼしている。人はつながりながら孤立し、共有しながらも共感を失い、流れの中で動いているようで実は立ち止まっている。

かつて日本の共同体には、「流れ」を共有する感覚があった。季節の巡り、祭りの循環、死者と生者が交わる盆踊り、自然と人が呼吸を合わせる生活のリズム。それらは人々の時間を重ね合わせ、社会を有機的に結びつけていた。しかし、都市化や制度化の中で、それらの循環は次第に失われていった。私は、アートとキュレーションの役割を、この「断絶した流れ」をもう一度編み直すことに見出している。展示を構築することは、空間に時間を呼び込むことであり、過去と現在、個と社会のあいだに新しい循環をつくることである。展示とは、静止したものを並べる行為ではなく、「流れを生み出す」行為にほかならない。

3、キュレーションとは「中空」に立つこと

私にとってキュレーションとは、主張することではなく“間をつくる”ことである。

キュレーターは、作家と鑑賞者、過去と未来、個と社会のあいだに立ち、どちらにも偏らずにその「中空」に身を置く存在である。中空とは、無関心でも中立でもない。むしろ、自我を空にし、他者や世界の声を響かせるための空間である。

松岡正剛氏は著書『日本という方法』(2020, KADOKAWA)の中で、「日本的なるものは、固定された実体ではなく、他との接触や揺らぎの中で編み直されてきた」と述べている。キュレーションの本質もまた、意味を付与することではなく、異なる文脈や時間をつなぎ、そのあいだに生じる“揺らぎ”を可視化することにある。キュレーターは、意味が生まれるための余白を整える存在である。私は展示構成を考えると、光や音、空間のリズム、鑑賞者の動きが一つの呼吸として共鳴する瞬間を探っている。そのとき、アートは社会とつながり、空間が生き始める。

キュレーションとは、支配ではなく調和である。そして、その調和を生むためには、自らが「無」になる必要がある。私はその「無」を、「聴くための空(くう)」として意識している。キュレーター自身が「無」になることで、作品と観客のあいだに自由な流れが生まれる。

4、祝祭としてのアート、社会としての記憶

「Ahead of the Rediscovery Stream」というタイトルには、時間の二重性がある。「再発見(Rediscovery)」は過去へのまなざしを、「Stream(流れ)」は未来への運動を示す。この展覧会は、振り返るためだけではなく、過去と未来を往還する「時間の流れ」を再構築する試みである。

祝祭とは、一時的に時間の秩序を解き放ち、人々を同じ場へと招き入れる行為である。

古代の祭りでは、日常と非日常、内と外、死者と生者、神と人の境界が溶け、社会そのものが更新されていた。

私は現代のアートもまた、そのような祝祭的な機能=時間の解放を生む力のある存在だと考えている。展覧会という場は、他者と時間を共有する一時的な共同体であり、そこでは「個人の記憶」が「社会の記憶」へと変換される。鑑賞とは、作品を理解することではなく、他者の時間を感じる行為である。アートの祝祭性とは、熱狂ではなく、循環である。喜びや悲しみ、過去や未来が交差し、そこから新しい関係が生まれる。アートはその循環の中で、失われた記憶をもう一度呼吸させる装置である。祝祭は、社会の「再生の回路」として、アートの根底に今も流れている。

5、「流れ」としてのアート、そしてキュレーション

「流れ」はこの展覧会の中心的なキーワードである。光や音、水、風、身体、記憶、これらはすべて流動的でありながら、確かなかたちを持つ。それぞれのアーティストは、異なる方向を向いた流れを生み出しているが、最終的にはすべてがひとつの川のように合流し、空間に新たな運動を生

み出している。アートとは、固定された意味をもたず、常に他者との関係の中で変化し続ける存在である。流れとは、所有できないものであり、常に変化し、境界を越えて、他者へと手渡される。だからこそ、流れに身を置くということは、未知に対して心を開くことでもある。アートはその流れの中で生き、社会や自然と呼吸している。作品が変わらずとも、見るたびに異なる表情を見せるのは、その流れに呼吸があるからだ。私はその呼吸を「かたち」にすることを、キュレーターとしての仕事と考えている。

6、再発見を未来へ

再発見とは、過去を懐古することではなく、未来を生み出すことである。私たちは過去を見つめるとき、その出来事の中に新しい時間の流れを見出すことができる。それは固定されたものではなく、絶えず編み直され続ける流動的な構造である。

私は本展を通して、「日本」という言葉を一度“空”に戻したいと考えた。

既存の「日本らしさ」を再生産するのではなく、その背後にある無数の声や記憶を聴き取り、再び問いを立ち上げること。「日本とは何か」という問いを、“誰かの問い”ではなく、“私たち自身の生の問い”として取り戻すこと。その揺らぎの中にこそ、未来への可能性があると感じている。

キュレーションとは、流れをかたちにする行為である。答えを提示するのではなく、問いの余白を整えること。その余白の中で、人々が考え、感じ、再び世界と出会うこと。

展覧会が終わったあとも、その波紋が誰かの内側で静かに続いていくこと。

それが、私にとっての「Ahead of the Rediscovery Stream」である。

アートとは、生を再発見するための方法であり、

キュレーションとは、その流れを生み出すための“間”を構築する行為である。

私は、その流れの先に、答えではなく、まだ言葉にならない未来を見ている。